

ほなひ歴史通信

第79号

2016. 6. 1

古文書との出会い

「乍恐以書附奉願上候」、こうした表題の付いたいわゆる古文書を初めて目にしたのは、今から四十数年前のことである。当時町では町史編さん事業が推進されており、昭和四十九年九月私はその事務局に配属された。編さん室では、委員の先生方が町内各地に遣る歴史資料を調査し、目録の作成や解読作業などを行っておられた。私はそこで初めて見る古文書に、ある種の感動を覚えた。

しっかりと和紙に墨で書かれたこの古文書が、二百年あるいは三百年の時を経て未だ少しも衰えていない。手に取ってみると何か心地よい。毛筆で書かれた文字も流れるように美しい。だが、とてもすらすらとは読めない。いやそれどころか、初めての私にとっては読み方が全く分からなかった。冒頭の一文「恐れ乍ら書付を以て願ひ上げ奉り候」、この行書と草書の入り混じった文字も所どころ読める程度、言葉も最後の「奉り（たてまつり）候（をうろう）」は「申し上げます」と言う意味なのだが、これも分からなかった。さらに本文となると、文字を拾い読みする程度なのでさっぱり意味が取れない。とても手に負えるものではなかった。先生方も解読しているなかで難解な文字が出てくると、皆で集まっている調べていた。

読めない文字を調べるには、『古文書解読字典』や『五體字類』

などがある。まずその難解な文字の前後の文章から、どう言う言葉が当てはまるのか。次にその文字（漢字）の部首、偏と旁の崩し書きをよく見て何偏かなど見当をつけ、先の字典などで調べる。字典に同じような崩し書きの字があり、意味も通れば解読できたことになる。毛筆の場合その文字をルーペ（拡大鏡）などを使ってよく見ると、墨の濃淡やかすれ、筆圧などから筆先の動き、筆順が分かることがある。そのため私は、常用漢字表の筆順を改めて書き写したりもした。もつとも、必ずしも筆順通りに崩しているとは限らないものもあるので注意が必要だ。

現代の私達にはちよつと馴染みの薄い、難読な言葉も使われている。よく出てくるものに例えば、無覚束（おぼつかなし）、急度（きつと）、稠敷（きびしく）、如件（くだんのごとし）、与頭（くみがしら）、委敷（くわしく）などがある。その他、異字や略字もよく使われている。また、仮名の崩し字は例えば、平仮名の「あ」は「安」を崩したものが、古文書においては他に「阿」を崩したものをを用いたりする。同様に、「き」は「幾」の崩し字であるが、他に「喜、貴、起、支」など、「け」は「計」の崩し字であるが、他に「氣、希、遣」などの崩し字を使っている。

手紙文は、古文書の中でもとくに難しい。書き手の個性があり、言葉も色々まちまちだからだ。ただ、文の始めと終わりは概ね決まった言葉使いをする。「一筆啓上仕候」、「御座候」、「仍而如件」、「恐惶謹言」または「恐々謹言」などである。歴史館や資料館などに行くと、著名な歴史上の人物や文化人などの手紙が展示されていることがある。ついつい足を止めて見入ってしまうのだが、いつも書き出しの二、三行をあらましに読んで断念してしまう。やはり、なかなかすらすらとはいかないからである。

古文書の解読は、読めないからこそそれが読めたときは達成感がある。大子町中央公民館では、古文書解読講座が開設されている。是非多くの方に参加してほしいものである。（井上和司）

私の太平洋戦争記（六）

野内泰子

水戸から勝田まではひと駅なので、勝田から通学している一年生全員で歩いて帰ったのである。水戸勝田間は線路の長さにして五・八キロであるが、道路は曲がりくねっているので七、八キロはあるのではないだろうか。それに、途中、遠くの空に飛行機の影が見えたりすると、慌てて田んぼや畑の土手をかけ下りて草むらにかくれたりすることもしばしばだったので、三時間近くもかけてやっと家にたどり着いた。こんなことが五、六回以上もあつたろうか。

昭和二十年五月二十四日、東京は二度目の大空襲により山の手の方も戦火に焼かれ、ほぼ全部が焦土と化した。

それから半月後の六月十日、朝九時前から九時半頃にかけて日立市が空襲された。日製日立工場がねらい撃ちされ、B29により一トン爆弾が五百発余も落とされたのである。そしてこの時、我が家の親戚筋に当たる女性がこの直撃を受け亡くなった。この人は、東京の人で都内の有名デパートに勤めていたが、どうせ徴用されるならばと、その一か月前前にデパートをやめて日立に移って来たばかりだった。因みに、この戦争で犠牲になったのは、私の親戚うちでは、この人ひとりだけである。

勝田では七月十七日未明、耳をつんざくような爆音と大地震のようなゆれに私は目が覚めた。何がおこっているのかとつきには分からなかった。まさにこの世の終わりのような、震度七クラスの地震が二つも三つも同時に襲ってきたような揺れと音とのか地鳴りというのか、すさまじい響きに声も出なかった。Nさんのお母さんが、私を抱きかかえるようにして布団から引きずり出し、後ろの押し入れに押し込んで、その上から覆いかぶさるよう

にしてかばってくれたが、それすら何がどうなっているのか分からなかった。どうやら人心地がついたのは、音がやみ、揺れが収まって辺りがいやに静まりかえってからである。押入れの前に立ってかけた畳をはずし、座敷にはい出してみて、何かとんでもないことが起こったのだと気がついた。Nさんのお母さんは預かっている娘（私のこと）に万が一のことがあったらと夢中がかえ込んだが、けががなくてよかったと喜んでくれた。私はなんと言っているのか言葉が出なかった。私より年下のご自分の娘さんもいるのに、先ず私の方を気づかってくれたことに対して子どもながらもお礼の言葉が見つからなかったのである。誰言うことなく、今は艦砲射撃だったのではないかということになり、外の様子を見に出ようとしたが、窓も入り口のガラス戸もガラスが粉々に割れて散らばり、履き物をはくことも出来ない有様であった。雨戸を開けようとしたが家がゆがんでしまい雨戸が動かなかったが、何とかNさんのお父さんやお兄さん達が雨戸をはずして開けた。やっと明けた朝の光に外を見ると、辺りは目を疑うような惨憺たる有様で、かろうじてではあったが、まともに建っているのはNさんの家ぐらいのものであった。

家の中を整理し、ガラスを片づけ外に出て家の周囲を点検してみると、大きな砲弾の破片が落ちていた。大きさは一辺が二十センチくらいの立方体に近く、周りはギザギザの針の山のように持つことができなかったが、やつとのことで布にくるんで持ち上げようとしたが重くて持ち上がらなかった。こんな物が真赤に焼けて飛んで来たのかと今更ながら生きた心地がしなかった。

Nさんと二人で勝田駅の近くの友達の家の方を見に行った。駅の近くには日製勝田工場や社宅、寮などが沢山建っていたが、社宅のあたりは家が飛ばされて後かたもなくなっている所が方々にあり、直径二十メートルくらいのすり鉢状の穴があいて、中に水がたまっている所もあちこちに見られた。（続く）（大子郷土史の会

大子町城館跡探訪八

野内 智一郎

十 八幡館跡（大子町上金沢字小屋）

大子町の西部、大子町上金沢字小屋に八幡館跡は所在する。国道四六一号線を西に進み、県道一五八号線との分岐地点を過ぎると、左手に台地が見える。小高い丘を含むその台地上が八幡館跡比定地である。台地は広大な平地となっており、現在は畑として使用されている。平地を一〇〇メートルほど進むと山林となつていく丘に達する。その山林の中に四つの郭が確認でき、丘のピークには祠が祀られている。祠のある郭の南には大規模な堀切があり、郭への侵入を防いでいる。

台地全体を範囲と考えると、かなり大規模な館跡となり、館を兼ねた当地の拠点城郭ともなりえる可能性をもっている。多くの押川沿いの城館跡と同様、西への備えと考えるのが自然である。八幡館跡の館主は現在のところ不明で、この八幡館跡の解明が、依上地区の研究の一つの鍵となつてくると思われる。

十一 館ノ沢館跡（大子町芦野倉字館ノ沢）

館ノ沢館跡は、大子町の西部、依上城の北西の山中に位置する。久保川の左岸、標高約二五〇メートルという山林の中にあるため、全体の把握が難しい。館跡は妙見山の南の山の尾根を利用して築かれており、林道の先に堀切と平場がある。

二キロメートルほどの範囲内にある依上城やその東の後述する芦野倉城跡との関係が想定されるが、館ノ沢館跡自体は標高も高く、今となつては不便な山中に存在するため、館跡というよりは物見や烽火台のような役割が想定できる。すぐ西側を川が流れているため物資輸送はしやすかつたかもしれないが、開発されてい

ない割に確認できた遺構があまりに少なかった。いずれにせよ、依上地区の他の城郭の補助的な位置付けの城郭であつたと考えられる。

十二 芦野倉城跡（大子町芦野倉字御城二六七外）

大子町西部、国道四六一号から県道二〇五号が分かれる地点の北西方向、芦野倉の台地上に芦野倉城跡は位置する。城跡と思われる台地上は現在宅地となっており、遺構の多くは開発に伴い失われてしまった可能性が高い。堀切跡を使用したような区画が残るが、明確な遺構は確認できなかった。

台地上を範囲と考えてもごちんまりとした印象が強く、現状から見るに補助的な城跡か物見と考えるのが妥当であろう。『新編常陸国誌』では、永享年間（一四二九年～一四四二年）頃木澤源五郎が城主とされているが、遺構からは得られる情報が少なく、不明な点が多い。

以上、今回で依上地区の九つの城館跡を踏査し終えた。大子町の中でも西部に位置するこれらの城館は、西（もしくは北）への防備としての役割を担っており、それぞれが他の地区に比べて非常に密集して築かれている点に特徴がある。大子町教育委員会主催の平成二十七年第四回ふるさと歴史講座の現地巡りの際、講師の阿久津久先生にご教授いただいたが、この地区の中心的城郭として位置付けられる依上城の特異性を分析していくことがとくに重要であると感じた。また、八幡館跡をはじめとするその性格の比定が難しい城館跡の精査が必要となつてこよう。そのためには、遺跡の現状を記録して図面におこす作業が今後不可欠となる。また、他地域との比較や金資源との関連も複合的に検討していくことが、遠回りのようだが当時の様子を知る最も正しい方法のように思う。

（水戸市在住）

金町屋台、本町屋台、泉町屋台の古写真(二)

大金 祐介

前回(本誌第七号掲載)の続きとして、今回も金町屋台、本町屋台、泉町屋台が舞台として使用されている様子が写っている古写真を紹介することにしたい。

②「金町屋台」 金町屋台が舞台として使用されている様子が写っている。向拝は右に、本殿は左に展開され、屋台の前に舞台が置かれている。通りが狭いからか、向拝と本殿がやや重なるように展開されている。撮影場所は、通りが狭く、金町の紋である釘抜きが描かれた行灯が写っていることから金町通りの北の方であると思われる。

③「本町屋台」 本町屋台が舞台として使用されている様子が写っている。向拝は右に、本屋は二つに開いた上で左に展開されている。屋台の前には舞台が置かれ、その舞台には橋掛りが設けられている。撮影場所は、左奥に水戸地方専売局大子出張所らしき建物が写っていることから、栄町通り(現在の大子町文化福祉会館「まいん」の駐車場入口前辺り)であると思われる。

④「泉町屋台」 泉町屋台が舞台として使用されている様子が写っている。ただし、泉町屋台には屋台を開く機能が無いため、屋台自体はそのままの状態である。屋台の前に舞台が置かれ、屋台の右側には語りや三味線などを担当する人のための小屋が置かれている。小屋の軒下に飾られている提灯には奉祝と書かれており、大正天皇の御大典との関連がうかがえる。撮影場所は、奥に写っている山の景観から、泉町通り(現在の松沼橋のたもと辺り)であると思われる。

(大子町大子在住)

③「本町屋台」



②「金町屋台」

④「泉町屋台」



依上地区、ある農業青年の挑戦と苦悩(中)

―特産品・りんごのルーツを探る(四)―

木澤源一郎さんが黒田一さんの話に刺激されてりんご農家を目指したのは、昭和三十四年三月に鯉淵学園を卒業して間もない頃であった。そして、りんご栽培についての勉強が始まる。関連本は水戸市の書店にもないため東京神田の古書店街に出かけ、永沢勝雄『果樹園開設のてびき』や渋川伝次郎『りんご栽培法』等の書物を手し、読みふけた。気象条件、土質、年間の平均雨量、標高等の点から芦野倉が栽培に適しているのか否かを確認し、「まあ、大丈夫だろう」と自分なりに納得した。ただ、芦野倉は標高が低く、高温多湿なので、青森県や長野県に比べると病気を防ぐための「防除が大変だなと考えた」半面、東京市場に近いので青森県に比べれば輸送コストは低く抑えられるので「ハンデは運賃で何とかカバーできるのではないかと考えた」とも言う。

こうした準備期間を経て、苗木を本格的に植えたのはその年の秋のことである。黒田宏さんたち先人が取り組んだのは早生種の旭と祝であったが、収穫したその実はすっぱくて売れなかったため品種の切り替えが進みつつあった頃である。黒田さんからも「これからは早生りんごではだめなので、ゴールデンデリシヤスとスターキングにしなさい」との助言を受け、木澤さんは、最初からこの二種類を植えることになる。当初予定した面積は三〇アール、一〇アール当たり三〇本を密植するので合計九〇本の苗木を、苗木の産地として有名な安行(現埼玉県川口市)から黒田さんを通して取り寄せた。先の品種を半々ずつ、つまりゴールデンデリシヤス四五本、スターキング四五本を、「受粉の関係で、蜜蜂が飛び交うのには品種が違った方がいいから」との理由で約五メートルの間隔をおいて交互に植える、いわゆる混植の形をとった。

生産者がりんご栽培の技術を習得し、向上させるうえで茨城県山間地帯特産指導所の役割が大きかったことは本誌第七五号でふれた。とくに、昭和三十五年に着任した大森高行技師の存在は木澤さんにとっても大きかったようである。大森技師とは年齢的にも近かったせいも、若手のりんご生産者「一〇人ぐらいを特別指導してやるからと言って定例の勉強会をつくり、何回も指導してくれた」し、福島県の園芸試験場や山形県の先進農家への研修にも同行してくれた。大森技師は「熱心な方、ものすごく熱心な方」であったと言う。山間地帯特産指導所へは何度も通い、栽培技術を磨くには非常に役立ったと木澤さんは回顧している。

木澤さんが参加した県外での先進地視察は、例えば福島県の場合は、飯坂温泉に菊屋という定宿があり、そこを拠点にして園芸試験場や特定の篤農家を訪ねた。また山形県の場合には天童市に宿泊し、当時の神町(現東根市)で生産していた複数の著名な先進農家を繰り返し訪ねて勉強した。「大子はいたいした産地でもないし、競争相手ではないから何でも教えてくれた。吸収する点は大きかった」。他に群馬県沼田市、長野県長野市、青森県弘前市、八戸市等視察先は広範にわたり、視察の回数は数十回にも及んだと言う。昭和三十六年頃、大子町農協りんご部(部長は黒田宏さん)のメンバーはバナナ輸入自由化反対の全国大会に参加し、その帰途、神町の先進農家を訪ねた。その時、訪問先の生産者から「反対するよりも、バナナに負けないうまいりんごを作ることが先決だ、と言われちゃって。先進地視察というのはそういう話が聞ける。技術的な収穫もあるが、夜に宿舎へ来てもらって宴会やりながら話を聞くのは大変勉強になりました」と振り返る。

植樹後十年たった頃から、りんごの実がなり始めた。種々の研修の甲斐あってか、早生種とは比べ物にならないほどの「おいしくていいものができた。とくに取りたてはおいしい」。だが、売れない。いかにして売るかとの難題が浮上してきた。(齋藤典生)

【資料紹介】昭和十二年元旦の双六に見る大子町の商店街

昭和十二年(一九三七)元旦の東京日日新聞新年附録で、「福徳円満寿呉録」(ふくとくえんまんすゝろく)が発行されました。双六(すゝろく)とは、紙の上で一つのさいころを振って早く上りに行き着くことを争う遊びです。その紙面には、統制経済直前の大子町の商店街の様子が描かれています。もちろん、全ての商店ではありませんが、次の三十六の商店が紹介されています。振出しが石井酒店で、上りは永瀬三四郎酒店になっています。

- ・振出し 家運万歳繁栄の基 契り久しき愛の基 元氣溼漑長生の基 石井酒店(家久長本店 愛宕町) 電話七六番
- (一) 島崎呉服店 本町 電話八番
- (二) よい茶は 溝藤園 (佐藤)茶舗 本町
- (三) 安く売る店 相山洋品店 泉町
- (四) 御気に召す蓄音機と時計、メガネは皆様の井上定針堂 金町
- (五) 桐材 履物 立花屋商店 泉町、本町売店
- (六) おいしい森永の菓子食品各種大信商店 駅前電話一三九番
- (七) 御待合 清藤 電話九番
- (八) 宴会大歓迎 袋田温泉ホテル (大子町袋田) 電話一四二番
- (九) 御婚礼 御着付 石井美容所 本町
- (一〇) 文房具 書籍 里仁堂薬局 電話三番
- (一一) 新しい薬と文房具 本店(金沢薬局) 電話六一番
- (一二) お醤油はマルサンに限る 丸三醤油支店 泉町
- (一三) 常磐サロン 大子駅前
- (一四) ノーリツ号、実用富士、メリット号販売 貝塚自転車店 自転車月の払なら当店へ
- (一五) おいしい品を安く売る店 あけほの堂 金町
- (一六) ツバメタクシー 電話二八番
- (一七) 親切 叮嚀 根本産院 愛宕町

- (一八) うまい酒 東力士 野州盛 売捌 一酒店 電話一二三番
 - (一九) 島田材木店 電話一三〇番
 - (二〇) 御婚礼用具は是非 高野指物店へ 泉町 電話一七番
 - (二一) 品質本位 果実籠詰 漬物佃煮 御用命は笹屋商店 泉町
 - (二二) 御料理 福本 本町
 - (二三) 品の良い 鳥肉 豚肉は 鳥宗で 電話一一五番
 - (二四) 婚礼と見合の御写真は 森山写真館へ 大子駅前
 - (二五) 御料理 宝亭 電話六九番
 - (二六) 化粧品 小間物は 助川百貨店 電話三五番
 - (二七) 洋品 雑貨は 植田百貨店 (本町) 電話一四番
 - (二八) 御料理 保里川 (大子駅前) 電話一二四番
 - (二九) 石版・活版 平凡社 本町
 - (三〇) 水戸より よい柄のある 真下呉服店
 - (三一) うまい酒 味のよい醤油は是非 大丸百貨店 電話六六番
 - (三二) 時計とメガネは 田中時計店に かざる
 - (三三) カフェー スズラン 電話一一六番
 - (三四) 御料理 割烹 芸妓置屋 新栄屋 (泉町) 電話三六番
 - ・上り 銘酒 サワヤカ (醸造元) 永瀬三四郎吟醸
- 商店の住所に「大子駅前」とありますが、水郡線の常陸大子駅開通は昭和二年三月十日で、その一〇年後の様子です。袋田温泉ホテルは昭和十一年十一月二日に営業を始めました。
- この年の七月七日に蘆溝橋事件が起こり、日中戦争が始まります。翌十三年には国家総動員法が公布され、国民は生活のすべての面がまんをしいられることとなります。昭和十六年十二月の真珠湾攻撃によりアメリカとの戦争が始まります。
- 戦争による生活物資の不足により、生活必需品の米、醤油、衣料品、マッチなどが切符配給制となっていくきます。そのような戦争経済の直前の大子町商店街の様子をうかがえる資料です。
- (大子郷土史の会の熊木歌子さんの御教示を得ました) (野内正美)

【史料紹介】 捕虜になった月居氏と戦国社会

天正十七年（一五八九）は、南奥地域（現在の福島県域）の戦国史にとつて激動の一年でした。蘆名（あしな）・岩城・白川氏を味方につけた佐竹氏と、田村氏と結ぶ伊達氏とが覇権を争っていて、両氏の動向を中心に均衡が保たれていました。しかし、同年六月の摺上原（すりあげはら、猪苗代町）合戦と伊達軍の黒川城（会津若松市）占拠によって、一気に伊達氏優位の状況へと移ります。

それとともに、南奥の武士たちが佐竹から伊達氏へと続々と寝返っています。その一人である浅川大和守（浅川町）に対し、服属を促す政宗の書状の中に一人の保内武士が登場します。

【前略】殊に証人替の儀、遠慮候と雖も、其方最前より此方へ一味の筋目に任せて、月之おれ次男を指越すべく候、其上にも不調に候らばは、須田むすめを相副ふべく候【後略】

（天正十七年十二月二十七日付浅川大和守宛「伊達政宗書状写」）

【特に（佐竹氏との）証人替え（人質交換）のことについて、（浅川大和守は）遠慮があると思いますが、あなたは先よりこちら（伊達政宗）に味方していた道理があるので、月居氏の次男を（交換する人質として佐竹氏に）遣わします。その上で、（人質交換が）不調でありましたら、須田氏の娘も一緒に提出します。】

ここに名前の見える月居氏の次男は、月居城に拠点を置く月居（野内）大膳亮の息子です。佐竹氏家臣の須田氏の娘とともに、佐竹氏との人質交換のために差し出されようとしています。この背景には何があったのでしょうか。

天正十七年の十月、政宗は佐竹側の南奥進出の拠点である須賀

川城（須賀川市）を攻撃しました。『奥羽永慶軍記』という後世に作られた軍記物語によると、佐竹方として、佐竹氏家臣の武茂左馬助・月居（野内）大膳亮が城の警固に遣わされていたことがわかります。戦況は、「岩城よりの警固竹貫・植田但馬守、佐竹よりの警固百々寺（武茂氏か）を始めとして、馬上三百騎を討ち取り候。足軽の事はその数を知らず」、「そのほかよきしゆ（衆）あまた（数多）うちころ（殺）し候」と政宗が豪語する通り、伊達氏の圧勝に終わりました。この時、須賀川城代の須田美濃の娘や月居大膳亮の次男が伊達氏の捕虜となったことが想像されます。

須賀川合戦直後に、政宗は浅川大和守に佐竹氏からの寝返りを持ちかけます。その際に、浅川氏が佐竹氏のもとに差し出していた人質が問題になったことが先の書状からわかります。近隣の同族である石川氏も人質を差し出していることから、南奥地域の領主が佐竹氏へ人質を出すことは一般的であったようです（もっとも、石川氏や浅川氏は佐竹氏を裏切った過去が背景にあると思われます）。政宗は、浅川氏の信頼を得るため、捕虜にしたばかりの佐竹氏家臣を人質交換のために差し出したのです。

年が改まり浅川氏が政宗の旗下に属した後も、佐竹氏との人質交換交渉は続きます。しかし、四月二十九日付の政宗書状に「証人替成就の義、茲（こゝ）元においても心安く満足迄に候」とあることから、無事浅川氏の要望が通ったことが窺えます。佐竹氏への人質提出から解放された浅川氏ですが、一方で浅川豊純の弟が伊達氏の許に人質として身を寄せているように、領主に対して人質を差し出すという状況から抜け出せることはありませんでした。

伊達政宗の書状に記載される月居次男の記事は、戦争による捕虜、領主への人質慣行など戦国社会の厳しい一面を生々しく語っています。このように、大子町に関する史料を発見し、それを丹念に読み込むという基礎的な作業を行うことで、過去の時代の空気まで明らかにすることができるとは、（藤井達也）

大子町産出の化石の紹介(下の二)

笠井勝美

(五) 滝倉のサイ類の足跡化石(図四)

平成二十年(二〇〇八)、滝倉川の左岸から発見された足跡化石は、茨城大学と茨城県自然博物館によって調査され、奇蹄類のサイ科、あるいはバク科の足跡であると発表されました。保存の良い化石は、二地点で六個ほどあり、ゾウの化石と同じに、下位の泥岩の間に保存されています。



図4 サイ類の足跡化石

(六) 浅川層上部の海成層中の貝化石(図五)
浅川層上部の貝化石は、滝倉、定本、袋田滝本、冥賀を経て町付、上郷、中郷、槇野地などの海成層分布地域に広く産出します。

地元で貝化石を調査している藤井節男氏はカキ貝など上位に密集した貝化石産地を発見し、多くの化石を保有しています。槇野地大野平などから産出したヨコヤマビカリヤなどの発見により、当時は熱帯性の環境であったと推定されます。

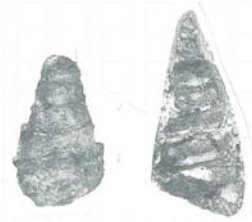


図5 ヨコヤマビカリヤ

(七) 浅川層上部から熱帯性マングローブ花粉化石
平成二十三年、筑波大学は浅川層上層部を調査し、上郷、中郷、槇野地大野平などから、マングローブでの花粉化石を多数発見したと発表しました。これによって、浅川層上層部は、熱帯ないし亜熱帯の環境下で堆積したと報告されています。

(八) 苗代田層からの有孔虫化石(図六)
男体山火山角レキ岩層の上位に堆積した苗代田層からは、貝化

石、ウニ化石、エビ化石などを産出しています。とくに有名なのは、月居トンネル出口や、下野宮井戸ヶ沢付近などから産出している有孔虫化石のオペキュリナとミオジプシナの二種類です。

苗代田層上位の小生瀬層では化石は産出せず、さらに上位の内大野層では希に貝化石やウニ類が発見されています。

訂正 第七六号に掲載した拙稿では、ナマコ化石の産出地が小生瀬層になってい

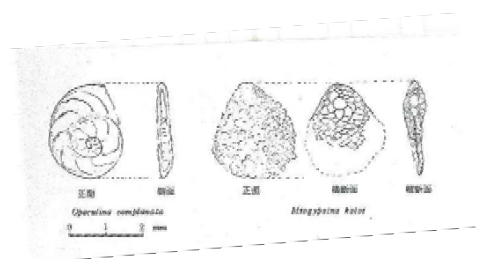
ますが、苗代田層に訂正します。

参考文献

一 菊池芳文他「茨城県北部注記中新統浅川層から発見された長鼻類足跡化石」(日本古生物学会)

二 安藤寿男他「茨城県大子町滝倉の中新統から発見された大型哺乳類足跡化石群」(茨城県自然博物館報告)

図6 有孔虫の化石



(オペキュリナ) (ミオジプシナ)

編集 大子町歴史資料調査研究会

編集人 齋藤 典生 (大子町歴史資料調査研究員)

野内 正美 (大子町歴史資料調査研究員)

井上 和司 (大子町歴史資料調査研究員)

藤井 達也 (大子町歴史資料調査研究員)

家田 望 (大子町教育委員会)

発行 大子町教育委員会

久慈郡大子町大字池田二六六九番地

大子町立中央公民館 ☎ 0295 (72) 1148